

エリザベス・ブラックウエルと家族制限問題

佐藤 共子

一 家族制限問題というタブー

アメリカの歴史学者、バトリシア・ブランカは彼女の洞察力に富んだ書物、「物いわない姉妹たち」(一九七五年出版)の中で、イギリスとアメリカ最初の婦人医学博士エリザベス・ブラックウエル(一八二二—一九一〇)⁽¹⁾が一八七〇年に子供を作ることが必ずしも結婚の目的ではないとさえいったと指摘した。⁽²⁾ブランカ以前にも彼女が家族制限を主張したという簡単な記述がないではなかったし、⁽³⁾「安全期間」の利用を認めていたとの指摘もあったが、それは一八八〇年との印象を与えていた。さらに、いくつかの彼女についての伝記、イギリスにおける婦人への医学解放運動の歴史などではその点について

てふれていなかった。筆者はそれらや彼女の自伝を読んではいたが、彼女のその他のかきもの大半を讀んでいなかった。しかし考えてみれば、ブラックウエルはイギリスとアメリカではじめて医学博士になった婦人であったのみならず、性教育をすすめた先駆者でもあった。フロレンス・ナイチンゲールの影響から予防医学の重要性をといった推進者でもあった。若い頃にはフリーエ主義に傾倒し、のちイギリスに来てはチャールズ・キングズレイなどのキリスト教社会主義に共鳴し、種々の社会問題と真剣に取り組んだ思想家でもあった。比較的よく知られているF・W・ニューマンの新マルサス主義批判のパンフレットに彼女は注をつけているが、⁽⁴⁾それ以上に詳しく家族制限という問題について意見をいっている

管であった。ブランカの指摘した彼女の一八七〇年の講演、「家族を健康にしておくには」はイギリスでは簡単に読むことができた。しかし一八八八年に彼女が新マルサス主義を批判した講演を行ったことがわかって、その印刷されたコピーはイギリスでも非常に見つけにくかった。図書館のカタログにはのっていても、現物はないという例もあった。結局、アメリカの国立医学図書館からゼロックス・コピーをとって送ってもらい読むことができた。ここでは彼女は自伝の中では詳しくはふれていない一八七〇年の講演の内容とそのよび起した反響について詳しくふれている。しかし彼女についてのいくつかの伝記は、それについては彼女の自伝の中での記述以上に掘り下げていないし、一八八八年の彼女の講演については全くふれていない。この講演の印刷されたコピーが手に入りにくいことも、その原因の一つであろう。

彼女自身の家族制限についての寡黙と、それについて発表した時の慎重さ、さらに彼女の友人たちの沈黙は、イギリスにおける婦人解放運動の先駆者たちの直面した一つの大きな困難をものがたろう。その説明のために、この論文では以下、一八七〇年の彼女の講演と、それが

ひき起しかけたスキャンダル、当時の婦人解放運動のいくつかの側面との関係を調べていく。

二 「家族を健康にしておくには」

ブラックウェルは、一八七〇年の冬の夜、ロンドンの「ワーキング・ウイミンズ・カレッジ」で「家族を健康にしておくには」と題する講演を行った。彼女は同カレッジの創立者、エリザベス・メルスン夫人（一八二八—一九一六）に招かれて、貧しい婦人たちが家庭を管理していく場合に役立つ、いわば健康手引ともいべき話をした。彼女の簡潔明瞭な話は聴衆に歓迎された。ところがその講演をきいた一人のこざかしい婦人文筆家は、ブラックウェルが「家庭を支えられる以上の子供を生んで家庭に重荷を負わせないようにと子供を生んでいる母親たちに忠告している」が、これは「あがご殺し、またはそれに匹敵する行為をさし示しているとさえ、みなされるかもしれない」と「ザ・ベル・メル・ガゼット」に書き送った。婦人への医学の解放の是非について激論が戦わされていた時であったから、彼女の話のうちで同紙に報道された部分は、エディンバラ大学医学部教授レイコ

ック(一八二一—一八七六)にたちまち利用された。

エディンバラ大学で半年に一度開かれる評議会の席上に婦人の医学教育が議題になった時、レイコックは、婦人に医学を学ばせると彼女たちは医者というより政治経済学者になる傾向があり、彼女たちは経験ある医師が決して口にしないような道徳の問題を論じ、たとえばブラックウェルは貧しい婦人たちに家族の増大を防ぐ方法を教えているが、それは時に社会を破壊する犯罪を導く結果になるといった。婦人医学生については、エディンバラで医学を勉強中の婦人たちは純粋な動機をもってやってきたが、いったいマグダラのマリヤ(更生した売春婦)がやってきたら、どうやってその動機を確かめるのだとさえいった。彼は婦人のいるべきところを家庭であるといい、婦人が医学に進出するのに反対した。

レイコックは医学をすずに学んだ婦人たち、学びつつある婦人たちすべてを攻撃したのだが、最も直接に攻撃を受けたのは、イギリスとアメリカの両方で資格をえて、すでに有名なブラックウェルであった。

レイコックが「政治経済学者」といった時、それは非道徳性をほめかす非難の言葉であったが、もちろん当

時政治経済学とよばれた学問すべてをさしていたのではなかった。それはマルサスの人口論を修正した政治経済学に当時支配的であった性道徳に真向から反対する自由な性の主張を加えた新マルサス主義の理論であった。また「社会を破壊する犯罪」とは「ザ・ベル・メル・ゲゼット」でははっきりいっていたあかご殺しとおそらく人中絶なども意味した。「経験ある医師が決して口にしないような道徳の問題」とは売春とそれにかかわる「接触伝染病取締法」を意味した。こういう重大な社会問題ははっきりと口にせず、「マグダライン」などと平然といつてのけたのが賢明でなかったと彼はまもなく悟らねばならなかった。

しかしブラックウェルは実際にレイコックが非難できるような危険な内容をもつ話をしたのだろうか。彼女の講演自体を調べなければならない。

まず講演が行われた「ワーキング・ウイミンズ・カレッジ」であるが、これはその設立の精神をキリスト教社会主義者、F・D・モリスに負っていた。彼はパンをかせぐことが労働者の時間を全部吸収してしまうべきではなく成人として勉強を続けられるようにすべきと考えて

一八五四年に男子労働者のためにカレッジを設立したが、その男子労働者たちが婦人労働者たちにくらべてはるかに優れた知識と教養を身につけているのを知ったメルスン夫人は「ワーキング・ウイミンズ・カレッジ」をクウィーン・スクエアに設立した。超宗派の立場に立つ同校は一八六四年十月に開校し、F・D・モリスやトマス・ヒューズだけでなく、のちの社会主義者、ウイリアム・モリスなどの後援も受けた。ニューヨークで医師として貧乏人のためにつくしてきたブラックウェルは、一八六九年にイギリスにきて、「社会科学会議」に出席し、売春とそれにかかわる諸問題の社会的側面に強い関心をよび起されていたところであった。

ブラックウェルは婦人労働者たちを前にして、ロンドンの貧しい諸地区にしばしば伝染病が流行まんえんするので講演を依頼されたと前置きした。家族制限については次のようにいった。

「病気がちの子供たちを世に送り出すのは残酷であり犯罪であるということを理解しなさい。」
これは当時としては全く大胆な主張であったが、彼女は結婚についての伝統的な考え方も批判した。

「結婚の目的は子供を生むことであると全くしばしばいわれるけれども、私はそう思いません。結婚はもっと高度な人間的な諸目的をもっています。けれども子供は結婚の貴重な特権です。」

彼女は、性生活をそれ自身の楽しみのために認めたわけではない。結婚の質と子供の質と両方の向上の必要をいいたのであった。つづけて彼女は優生学的な主張をした。

「あらゆる形の慢性病は結婚する資格を失わせるものです。特に有害なのは、るいれき、あるいは結核の傾向、あるいは精神病の危険のある場合です。これらの病気の一つを持っているもの同志は法律によって結婚を禁じられるべきです。」

結核が遺伝するという考え方がまちがっていることは今日では周知だが、当時はそう信じられていた。しかし、「法律によって結婚を禁じられるべき」というのはずいぶんおもいきった主張である。現在であつたら避妊をして子供を作らなければよいとの反対意見が容易にできる。しかし家族を制限する方法について彼女は次のようにうにとどまった。

「現在では確立された生理学上の法則の管理下にあり、それらの法則は両親に知らされるべきであり、妻の健康・幸福がなにもまして重要であると考えられるべきです。」

彼女がここで避妊方法として暗示しているのは、「安全期間」(現代の生理学の知識では安全ではないとわかっている期間)とそうでない期間をおぼえて性生活を行うようにということであるが、講演の中ではそれをはっきりいったかもしれないが、印刷したものには、はっきりでていない。^(8b)

しかし婦人の健康・幸福という点から家族制限が必要であるという論点を彼女はくり返した。すなわち、

「家庭が支えられる以上の子供を生んで、家庭(母親がその中心である)に重荷を負わせないことです」と。

数多い子供の出生・扶養がもつとも重荷になるのは、いうまでもなく貧乏な労働者の家庭であり、その重荷をもつとも直接に背負うのは母親である。ブラックウエルの講演の印刷されたものの中には、「婦人衛生協会」

(Ladies Sanitary Association) という貧しい婦人たちに保健・衛生思想を具体的にやさしく教えるための組織のために販売されると刷りこんであるのもあった。講演が行われた場所も貧しい労働者階級の婦人たちのための学校であった。貧しい労働者階級の婦人たちの教育、福祉の改善のために働いた中流階級の男女の中には、ブラックウエルだけではなく、他にも、彼女たちにとって家族制限が必要であると感じ、その知識をひろめる手伝いをしていたものがかなりあったにちがいない。

右にみてきたように、ブラックウエルは、もちろん貧困と病気との深い関係を充分に意識しながらではあるが、母親たち、子供たちの健康、民族の健康という観点から主として家族制限をといた。しかし、家族制限の問題は、当時は貧困の原因を説明するものとしてのマルサスの人口法則についての論議なしには普通論じられなかった。そしてそれを論じた専門家が政治経済学者であり、その中にはレイコックのいう意味での、つまり「非道德的」な政治経済学者も入っていた。彼はブラックウエルのような観点から家族制限をすすめた人もかれらの仲間に入れてしまった。ではそういう「非道德的」な政治経済学

者を当時代表したのを誰であったか。それは彼女がのちになって「新マルサス主義の聖書」といってもよいとして真剣に批判することになる。「社会科学の諸原理」の匿名の著者、ジョージ・ドライズデルであった。彼は人口法則が人間をもっとも不幸におとしられている経済的貧困と性的欠乏を生んでいるのであり、禁欲は売春のよくな大きな社会悪を生んでいると主張し、それらをなくすことができるのは、禁欲以外の方法による避妊であるとした。ジョージの著書は大きな注目をひいたが、彼は決して大衆の前に名乗りでなかった。当然のことながら著者が誰であるかとの推測がさかんに行われた。同書を読んでいたJ・S・ミルはそれがジョージの弟で、のちにマルサス主義連盟の初代会長になるチャールズ・ドライズデルであろうと考えていたから、他にもそう考えていた人が数多くいたろう。チャールズはジョージのように大胆な性の自由の主張をしてはいなかったが、婦人への医学の解放運動には積極的に力をかしていたし、売春、あかご殺しなどの問題を論じるにあたっては、控え目ながら新マルサス主義の意見を表明をしていた。

しかしドライズデル兄弟にしろ、一八七〇年に「大

家族、それとも小家族？」と題する家族制限を主張するパンフレット⁽¹¹⁾を出版した無神論者で社会主義者のオースティン・ホリオークにしろ、避妊用具がどのようにしてどこで手に入るかなどを教えるものはなかった。しかし同年にはM・A・オアという広告代理業者が婦人用避妊用具であるペサリイを一般新聞に広告していたと医学専門誌で問題になった⁽¹²⁾。ブラックウェル自身、彼女の講演のごく一部が「ザ・ベル・メル・ガゼット」に掲載されるや、種々の階級の人々——国會議員、陸軍将校、牧師、その他——の人々から、どういう仕方で子供の増加を防ぐことができるか詳しく教えてほしいと求める問合わせの手紙をうけた⁽¹³⁾。社会の種々の階層の人が避妊の必要を感じ、そのための有効な手段を求めていることを彼女自身深く認識したろうし、レイコックも医師であったからよく知っていたにちがいない。

レイコックがブラックウェルを攻撃したもう一つの論点、あかご殺しという問題は新マルサス主義者の言葉をまつまでもなく、家族制限という問題に深い関係があった。もちろん両親があっても口べらしのために殺されたあかごもあったが、あかご殺しを一八六〇年代から公け

の論議に持ち込んだ統計学者や医師たちは、私生児の中にきわめて高いあかごの死亡率との関連においてそれを行った。私生児はしばしば職業的里子養育人にあづかれ、餓死させられたり、粗末に扱かれて死んでいくものが多いとみられた。ブラックウエルが講演して数カ月後にはマーガレット・ウオーターズという職業的里子養育人がそうした罪を犯した疑いで告発され、それは新聞にひろく報道された。私生児のあかご殺しが問題となつて、当然そういう私生児を生んだ母親に改めて注意が向けられた。私生児を生んだ婦人は、罪の子を生んだという罪悪感に苦しめられた上に、墮落した女としてレスベクタブルな社会から閉め出されたから、生活のために売春をせざるをえないものが多かった。ブラックウエルは、一八六九年の秋、ブリストルで開催された「社会科学会議」のあかご殺しが討議された部門で、母親が子供を出産してすぐ殺した場合にきびしく罰することは、彼女の医師としての経験から、かえってあかご殺しの犯罪を増加させる傾向があるとして反対し、¹⁴⁾ 同部門はそういう場合の死刑を廃止することを勧告する決議案を通過させた。それらのことがどの程度レイコックに知られていた

かわからない。しかし識者の中にさえ禁欲以外の人為的な方法による避妊を人工中絶あるいはあかご殺しと同一視したものがいた時代であったから、ブラックウエルが家族制限をすすめたということだけで、あかご殺しを導くような手段を教えていると曲解した宣伝をすることができたわけである、この時点では、あかご殺しの問題に取り組んだフェミニストたちは、あかご殺しも売春も人口法則の作用による人口抑制方法の一部であるとした新マルサス主義を思わせる文章の発表はまだしていなかった。

レイコックが婦人医学生や医師が「経験ある医師たちが決して口にしない道徳の問題」を論じているといて非難した売春と「接触伝染病取締法」はあかご殺しの問題とも関連していた。「接触伝染病取締法」は守備隊が駐屯する諸都市で売春婦とその疑いある婦人たちを強制検診し病気にかかっているものを特別病院に強制収容できることにした性病対策の法律であった。この法律は職業的売春婦と共に、低賃銀を時おりの売春による収入で補足しなければ生きていくことのできなかつた貧乏な婦人労働者たちと、売春婦でなくともその嫌疑を容易にか

けられそのような環境にあった貧乏な婦人たちにもっとも直接に関係があった。同法に反対して立ち上った人々は、それが彼女たちを取締り、彼女たちの人権をふみにじる一方、男たちの責任は問わない不平等な法律であり、なにもまして重大なのは男女にそれぞれ別の婦人に不利な二重の道德律を課することを合法化した点であると論じた。同法の推進者たちが売春を必要悪であるという立場をとっていたの¹⁵に對し、反対者たちはそれは撲滅できるとした。レイコックの非難をまつまでもなく、レスベクタブルな社会では決して口にしてはいけない性の問題、売春を公けの場で婦人が論じるには大きな勇氣と決意が必要であった。事実、婦人参政権運動その他、主として中流階級の婦人たちによる、彼女たちのための種々の婦人解放運動の指導者の中には同法反対運動に参加するところが彼女たちの第一目的である運動を不利に導き危険におとし入れると考えて公然と支持することをはばかったものもあった。しかし、黒人奴隷に反対であったブラックウェルは婦人の体の売買にも反対した。同法反対運動に彼女はすでに積極的に参加していた。彼女が売春にかかわる問題、たとえば売春婦の更生などについてま

った考えを発表するのはまだ少し先のことであったが、性教育の必要を論じている場合にも、彼女の思考の底にはたえずこの大きな社会悪についての洞察という背景があった。

レイコックの演説以前に、「ザ・ベル・メル・ガゼット」はブラックウェルが同紙にのった彼女の講演報告中の誤りの訂正を求めた手紙を掲載した¹⁶、彼女はこの手紙の中で、「子供を生んでいる母親にだけ家庭が支えられる以上の子供を生んで家庭に重荷を負わせないように、¹⁶いっているのではなく、両親によびかけたのだ」といい、家族制限が女だけの責任ではなく男の責任でもあることを強調したにとどめ、あかご殺しの問題などにはふれなかった。結果としては彼女本来の意見を全く修正しなかった。

ブラックウェルはレイコックの演説が新聞、雑誌に大きく報道され、中には彼女の名前をはっきりあげているものもあったが、沈黙を守る気持でいた。彼女の友人、チャールズ・キングズリーも、新聞はその売れ行きを増すためにはどんなスキャンダルでも喜んで使うのがあるから、新聞の攻撃には決して答えない方がよいと忠告した¹⁷。

しかしエディンバラ大学で婦人への医学解放運動を指導していたソフアア・ジェックス・ブレイクがブラックウエルの講演で引用され流布されている部分は同運動に害を与えているというので、レイコックの非難を強く拒否し、彼の論拠となっている証拠を求める声明を発表したが、レイコックはそれに答えられなかったと彼女はのちにべた。しかし彼の演説を報道し論評した新聞、雑誌についていえば、それらがすべて彼に同調し、彼女や婦人医学生たちを非難した訳ではなかった。たとえばロンドンの「タイムズ」紙は、ブラックウエルの名もレイコックの名もあげずにだが、「マゲダリンが教室にきたら」などというのは「婦人の名誉と男らしい感情をふみにじるものである」と抗議した。医学誌「ザ・ランセツト」⁽²⁰⁾も抗議に同調した、それらの抗議批判の前に彼は弁明せざるをえず、エディンバラ大学で夏学期の講義を始めるにあたり弁明を行い、それはエディンバラで発行されていた「ザ・スコツツマン」紙に⁽²¹⁾掲載された。彼はすでにいったことを論証する新しい材料も提供していないが、それを撤回もしなかった。この弁明がブラックウエルの上述の弁明要求に対する返答であったかもしれない。

レイコックの再度の演説について、婦人への医学解放運動を強く支持し、チャールズ・ドライズデイルなどの新マルサス主義の見解表明に多くの紙面を提供していた「ザ・メデイカル・プレス・アンド・サーキュラー」誌は彼女の講演自体からの抜粋を掲載し、J・S・ミルが大家族を持っている人々は酔っぱらいと同じようにみられるべきであるといっているとのべ、彼女を弁護した。⁽²²⁾

婦人医師となつてからは職業柄、夜おそく街を歩いていて夜警に夜の女とまちがえられたというような屈辱も経験したことのあるブラックウエルは、彼女と婦人医学生にかかわる道徳論争の激しさにも容易に動じなかった。彼女はまたその論争の続いていた五月二日の夜、ロンドンでフェミニストのエミリー・フェイスフル (1836—1895) が主催する「ビクトリア討論協会」(Victoria Discussion Society) の集りで「婦人のための専門職としての医業」と題する講演を行った。⁽²⁴⁾ 討論にはチャールズ・ドライズデイルも参加した。

しかしまもなく、婦人医師と医学生にかかわる道徳論争が消えかけたと思われた時、「ザ・メル・メル・ガゼット」は再び家族制限という問題を、今度は「接触伝染

病取締法」反対運動との関連で取り上げた。⁽²⁵⁾ 同紙はその反対運動をしている人々が同法に代ってそういう病気を抑圧する方法として提案しているものをよく考えるべきといひ、チャールズ・ドライデルは早婚と家族制限によつてのみ、それは可能であるといひ、あわせてアメリカのインディアナ州のように離婚が容易にできるよゝにすべきと主張しているが、僧職者諸氏はそれらについて注意を向けられたいとけしかけた。またイギリスの婦人たちはそのような代替提案を受けいれるよう赤面もせず訴えられてゐると挑発的に書いた。それに対して、この反対運動の指導者、ジョセフィン・バトラ夫人は黙つてはいなかつた。⁽²⁶⁾ 彼女はドライズデルが離婚、家族制限、その他の問題について持っている諸見解には「全く共鳴しない」とことわり、彼女自身の名前と、「接触伝染病撤廃のための全国婦人協会」の名前において、それらに反対であると抗議を表明し、純潔な道徳を主張した。彼女は離婚を容易にできるよゝにすること、家族制限をすすめることを純潔と対立させたが、その考え方に關する限りでは、レイコックが避妊が性的放縱を招き、家庭を破壊するにお寄せた考え方と共通している。

しかしバトラ夫人と協力してゐた一つのグループのフェミニストは私生児の問題に關連して、一八七一年、家族制限の必要をといひた。職業的里子養育人を登録し國が監督することを規定する条項を含む「幼児の生命のよゝりよい保護のための法案」が同年、議會に提出された。それに対し婦人の側の福祉が無視されてゐるよゝことで、婦人に害のある法律を改正せよとすゝる委員會が設立された。同委員會は「幼児死亡率、その諸原因と諸解決策」と題するパンフレット⁽²⁷⁾を發行した。その趣旨は、若い婦人を誘惑し私生児を生ませた男は法律上全く責任をとわれず、一方、そういう婦人たちは自活したくとも充分な賃金を保証する職はなく、國は彼女たちに全く不充分的施設、援助しか与えてゐないのは不当であるといふのである。さらにこのパンフレットの中では、「あまりにひんばんな妊娠は健康に有害である」とブラックウェルと同趣旨の指摘を行い、「婦人たちは法律により強制的にその夫たちに従わされるべきではない」と、まさに現代の結婚内でのレイプに反対するよゝな主張をした。さらに低賃銀は人口の圧力が生み出すものとして、「法律的・道徳的諸影響が年ごとに國に加わる数の望ましい

減少を実現させるだろう」とのべた。この委員会の原動力は早くからパトラー夫人に協力して「接触伝染病取締法」撤廃運動をしていたエリザベス・ウルステンホルムという婦人教師であったが、右に引用したパンフレットもおそらく彼女が書いたものと思われる。彼女は自由結婚をつらぬき通そうとしたくらいだから、離婚を容易にすることに賛成であつたろうが、公けにそういう意見はのべなかつた。

以上みたように一八七〇年という時点では、ブラックウエルやウォルステンフォルムなどとえきわめて少数であれ、貧しい婦人たちの健康・福祉の増進のために働いた著名なフェミニストたちが非常に強い言葉で家族制限を主張した。しかし以後一八七〇年代の終り近くまで、婦人への医学の解放運動、「接触伝染病取締法」撤廃運動を押し進めて行く中で彼女たちも同問題について口を閉じてしまった。しかし彼女たちは意見を交えてしまった訳ではなかつた。彼女たちの沈黙の理由は、ブラックウエルの一八七〇年の講演とそれに対する反響を頭において、彼女が再び家族制限について意見を詳しくのべた一八八八年までの彼女の思想の発展と活動を調べる時、

かなり明らかにされよう。

三 ブラックウエルの新マルサス主義批判

一八七〇年はエリザベス・ブラックウエルの思想の発展・成熟の歴史の中で重要な時点であつた。アメリカでの婦人への医学解放運動の先駆的な仕事が終わつたと判断して、彼女は前年にイギリスに来て、若い頃から強い関心を持っていた種々の社会問題に本格的に取り組もうとしていた。「家族を健康にしておくには」と題する講演は、彼女の新しい姿勢を示す最初のもつた印刷物であつた。それは書籍の一般流通機構を通して配布されたものではなかつたらしいが、すでにみたように大きな注目をひく結果となつた。彼女はそれ以前からイギリスの上流階級婦人たちに招待され、歓迎されていた有名な人であつたが、彼女はそれにあきたらず、貧困・売春など深刻な社会問題を医師として鍛えられた眼で直視し、それらの解決策を求めた。

一八七一年にはウイルアム・ベアの訪問を受け、一八三〇年代にアイルランドに設立されたオーエン主義のコミュニティ、ララハイド農業協同組合の話に興味深くき

いた。翌年の夏にはフランスの北部、ギーズにゴダンが設立していたフリーエ主義のコミュニティをはるばる訪問した。彼女はさらにルツェルン、チューリッヒ、ローマなどヨーロッパ各地を旅行し、諸国の風俗、社会状況を観察した。彼女は貧困は自然法の作用とされる人口法則のためではなく、人間の行為、資本と労働の利害を調和させることに失敗した結果として生れるものとし、墮落している男女関係を改善・向上させるのも協同であると考え、キリスト教社会主義をと考えた、かつて一八四〇年代のなかばに、フリーエ主義に改宗したマサチューセット州のブルック・ファームに強く引きつけられながら、その中での唯物主義的要素にはなじまず、そこで経済的、社会的要素に加えて宗教的要素が必要であると聞いたユニテリアンの牧師、W・H・チャニング⁽³⁰⁾に傾倒したのであった。彼女のキリスト教社会主義への共感は、かつてのチャニング流の協同主義への傾倒と共通したものがあつた。さらにまた彼女は、病気がちのためロンドンを去って住んだイギリス南海岸の町、ヘイステイングズで、「接触伝染病取締法」の適用を受けていたその町の政治的墮落をまのあたりみて、中央政府が強力になる

につれ、地方自治は弱まり墮落していくとし、地方自治復権を主張し、そのためのキャンペーンを行った。激しい党派闘争の場となりがちな地方政治を抑えるものとして彼女は theocracy の原則のためにたたかう個人の自由グループを提案した。人間性のうちにある高貴で優れたものは全能なる創造主のもつ、より強いそうした力の弱弱い反映であるとみた彼女は、そうした意味で神の意志をこの世に実現しようとする theocracy が正しい、民主主義政治であると考えたにいたつた。

ブラックウェルはイギリスにおける婦人への医学の解放運動にも力をかし続けた。保健衛生の改善には立法措置と共に教育が重要であるといつた彼女の講演「健康の宗教」(一八七一年出版)は「国民健康協会」(National Health Society)の設立を導いた。

ブラックウェルは彼女の思想の形成、発展の中で、保健衛生教育、性教育の普及の必要について書き、性教育書を出版し、売春、接触伝染病に関する諸問題、キリスト教社会主義、地方自治の衰退について講演し、あるいは書き、発表を重ねた。しかし家族制限という問題がそれらのうちの多くの問題に関係があるのにもかかわら

ず、一八八八年までは詳しい意見をのべなかった。

一八七八年に多くの出版社にことわられたあげくに私費印刷した書物、「子供たちの道徳教育について両親への助言」と題する性教育書の中では家族制限について簡単にではあるがふれた。しかし翌年第二版が出版された時、彼女はそれらの言及箇所をけずることを余儀なくされた。一八七八年は、新マルサス主義を公言していた婦人医学生たちが大学の医学の勉強を続けるために沈黙させられた年でもあった。⁽³¹⁾

一八八八年ブラックウェルは「新マルサス主義という墮落に対比するマルサスの博愛についての医学的講演」を行ったが、それは明らかに公開講演ではなく、限られた、教育ある婦人たちを対象としていた。それは一般向けには出版されず、個人的に印刷され、限られた人々の手にわたった。彼女はマルサスの人口法則は認めなかったが、家族制限はどんな環境の中でも必要であると考えたといつた。彼女がマルサスを讃えるのは、彼女のいう、彼の博愛的な意図、つまり人間に自制心を認めた点で、それに比較して新マルサス主義を代表する「社会科学の諸原理」は、無制限な情熱を弁護しているとし、その自

由な性思想を批判した。彼女が認める健康に害がなく、墮落的でない避妊の方法は、かつてと同様に一種の「安全期間」の利用であり、時には男子が withdrawal を行ってもよいとし、婦人が避妊を目的として性行為後に膈内にぬるま湯を注入して洗うことも認めた。新マルサス主義者たちがすすめている避妊方法のあるものは、たとえば刺戟的薬物の膈内注入など婦人の健康に害があると、そういう方法を用いた婦人を患者として扱った経験から、きわめて科学的、具体的に話をした。その詳細な医学的、生理学的記述は、すなわち彼女が道徳論を離れる時、当時の新マルサス主義者たちの避妊方法についての記述とくらべてはるかにまさっている。後者は生理学的に精確な知識が有効な避妊のためには絶対に必要などころでも、それについて具体的にいわず、また種々の避妊方法を用いた症例の集積も発表していなかった。彼女のいう「安全期間」は新マルサス主義者たちのいう「安全期間」と同じで、それが本当には安全でなかったことは悲劇的である。しかし種々の避妊方法の長所・欠点を婦人の体の構造の具体的な説明と共に指摘した彼女の講演は、新マルサス主義者たちの大半が公けに与えていた情報よりも、

読者にとって、はるかに有益である筈の情報を提供した。しかし、彼女の驚くべき近代性はそれだけではなかった。

「安全期間」を主な避妊方法としていることから当然といえは当然であろうが、性交を行う時を決めるのは夫でなくて妻であるべきであり、それがただ一つの自然な、家族の大きさを調節する方法であるといった⁽³³⁾。さらにまた、「安全期間」のすすめと関連して、「結婚内でもレイプがあるかもしれないということが現代では次第にはつきりしてきている⁽³⁴⁾」と指摘し、そういうレイプにも反対した。そのような婦人の性的独立を認める観察と意見は、たとえブラックウェルのように医師として長い経験を持ち、世間の信用と尊敬を受けていた人のものであっても、今から百年近くも前に一般向出版物として発表することは危険であつたろう。彼女自身の見解によれば、当時はまだ一八七〇年に彼女が家族問題を取り上げた時と同様の困難が存在した。

一八七〇年の困難はブラックウェルの「家族を健康にしておくには」と題した講演に対するレイコックの批判、ドライズデイルに対するパトラー夫人の抗議の中にはつきりとみることができるといえる。レイコックのブラックウェル

攻撃は婦人への医学の解放という白熱的に論じられていた問題が直接のきっかけではあったが、その背景には家族制限に強く反対していた医学界があり、医師たちの多くはまた「接触伝染病取締法」という当時ようやくけに討議され始めてきた法律に賛成していたという事情があった。

レイコックは人為的な避妊方法による家族制限は非道徳的であるといったが、そういう議論は医学会に支配的であった。新マルサス主義を公言した三人の婦人医学生は彼女たちが学んでいた医学校の学生たちに臨床訓練の機会を提供していた病院の医師たちの反対が主な原因で沈黙を余儀なくされたが、かれら医師たちの反対理由は道徳論であった。同じ時期にラウスという医師が、他の反対理由とともに家族制限は幸福な家庭に非道徳的な習慣を導入するという見解を表面したが⁽³⁵⁾、それは医学界の同問題にたいする代表的道徳論であった。

家族制限を主張するブラックウェルのような婦人にとって、医学界に支配的な家族制限反対は二重の意味で足かせであった。家族制限の知識を深め、それを他の婦人たちに伝えるために婦人医師の養成はもっとも重要であ

ったが、婦人への医学の解放運動が推進されていた一八七〇年代に、その運動を家族制限の主張と結びつけて、非道徳的な運動のように宣伝されることは不利であった。新マルサス主義のため、あるいはたんに家族制限を公けに弁護したために受難しかけたのは、婦人医学生、婦人医師だけではなかった。男の医師、ヘンリー・オールバットが受けたような迫害も考慮に入れなければならなかった。このリーズ市に住む医師は、避妊方法についての具体的な情報を安い、すなわち貧乏人の手にとどくような書きものの中で提供したが、一八八七年、それは職業的に悪趣味であるとして、イギリスの「医師登録名簿」から名前を消されてしまった。

「接触伝染病取締法」反対運動はすでにのべたように、その終局の目的は売春の撲滅であった。ハバロック・エリスは売春なしには当時の家族制度を維持することはできないといったが、⁽³⁷⁾ 売春撲滅をめざす運動は、家族制度、つまり社会の土台を揺する危険な運動でもあった。それはレイコックの観測通りであった。そういう性格をもつ運動に加えて、性の自由、離婚の自由を弁護して、これまた当時の家族制度を破壊しようとしているとみなされ、

実際にその変革に導くことが必至な新マルサス主義の家族制限の主張にまで加担することは戦術的に賢明でないとみた向きもあったろう。売春撲滅運動の主流は、バトラー夫人の場合にみたように、純潔主義を旗印とした。かれらはすべての人間は平等であり、一部の婦人たち、売春婦とよばれる婦人たちを、その他の人間のために非人間的な道具、商品として用いるべきではない。男たちもそのように教育されれば、女たちと同じく純潔・貞節になれると論じた。かれらの純潔の概念では、性を合法的な結婚の中にだけ認め、未婚者には禁欲を要求した。ブラックウェルもそういう意見であった。「接触伝染病取締法」反対運動は、同法推進者たちの性病対策という主張がもとづいている、レイコックのような道徳論に決していかなければならなかったことから、ますます純潔を強調する運動となっていた。

ブラックウェルは一八八八年に家族制限を論じることには、当時流行していた新マルサス主義のわけつな教えのために一層むづかしくされているといった、⁽³⁸⁾ 彼女は独身や、結婚してからの禁欲はよくないとする一方、人為的な避妊方法の採用は無制限な情熱の耽溺をうながすと

して、早婚、結婚内での節制を強調した。家族制限の主張が無神論的で性の自由を弁護した新マルサス主義ときり離して考えられにくかった当時の風潮の中で、彼女のようにな宗教的で自制を重んじた人が家族制限を主張にくかったということが、彼女の同問題についての用心深さを部分的に説明するだろう。

彼女は一八九九年に彼女のすでに発表した論文のうちいくつかを収録した「医学社会学論文集」を限定した読者のために私的に印刷したが、⁽³⁹⁾その中には一八八八年の新マルサス主義批判の講演が含まれていた。しかし一九〇二年に同論文集が拡大され出版された時、その講演をはずした。⁽⁴⁰⁾一八八八年にそれを公開しなかったのと同じ理由で、その内容が一般読者には不適当であると判断したと思われる。

ブラックウェルの一八七〇年の講演は、貧しい婦人たちに家族制限の知識を与えることの必要を彼女がためらいなく認めていたことを示したが、いまや彼女は貧しい人々がどういう方法で必要な知識をえたらよいと考えたのだろうか。彼女は若い人々に性教育をするのは両親がもっとも適当と考えたが、場合によっては医師が、その

問題についての権威として一般に認められているので、それを行うのがよいとした。⁽⁴¹⁾彼女はそこで若い人々は感受性が強いから、それを傷つけないように上手にしなければならぬともいった。家族制限は性の問題であり、性教育と切り離しては扱えないから、やはり医師が、特に婦人を対象としては婦人医師が相談にのり、必要な知識を伝えるべきと考えたのであろう。

ブラックウェルの友人たちは、かれら、かの女ら自身が家族制限をするかどうかの問題を別にして、あるものはそれを一般にすすめることに賛成であったろうし、他のものは反対であったろう。しかし、かれらはすべて彼女の二つの講演について、それらが今みてきたように重要なものであるにもかかわらず、沈黙を守った。彼女の家族制限についての考えは彼女の社会思想を構成する重要な要素であるにもかかわらず、かれらは彼女のイギリス・アメリカ最初の婦人医学博士、婦人への医学の解放運動の先駆者という観点からのみ彼女の業績を印象づける傾向が強かった。かれらは、ブラックウェル自身が彼女の家族制限の主張を公けにしない方がよいと考えた同じ理由で、その面での彼女の思想について沈黙を守った

のであろう。その結果、彼女が家族制限や新マルサス主義について長い間にわたり深く考えていたことと、彼女が新マルサス主義から独立した、いわば今日の家族計画の考えに近い考え方をしていたことを、われわれに見落させる大きな原因となった。

(一) Elizabeth Blackwell の書かれたものと彼女にいうての書物は、一橋大学図書館には大塚文庫(整理中)の中に次のものがあり、加えて小平分館にその中の(ii)が、経済研究所に(iii)がある。

(i) Blackwell, E., *Counsel to Parents on the Moral Education of their Children*, New York, Brentano's Literary Emporium, 3rd edition, 1881.

(ii) Blackwell, E., *Pioneer Work in Opening the Medical Profession to Women*. Introduction by M. G. Fawcett, London, Dent, [1914] Everyman's Library の書物は彼女の生涯の晩年まで扱っていらすが、一八八〇年頃までの自伝的記述と手紙が主である。本論文の中で自伝としよう場合この書物を中心とする。

(iii) Ross, Isabel, *Child of Destiny, The Life Story of The First Woman Doctor*, New York, Harper & Brothers, 1949.

ロムにちなむブラックウェルの伝記を図書新聞第二九四号

(一九五五年四月三十日号)で紹介された大塚金之助稿「英・米最初の婦人医学博士」は、近く刊行される『大塚金之助著作集』に収録予定である。
ブラックウェルの著作のうち本論文で参照した主なものを次にあげる。

Counsel to Parents on the Moral Education of Their Children, London, 1878; Second edition, revised, London, 1879; 7th edition, London, 1884.

Essays in Medical Sociology, London, 1899. [Contents: The Human Element in Sex. The Corruptions of Neo-Malthusianism. Medical Responsibility in relation to the Contagious Diseases Act. Rescue Work.]
Essays in Medical Sociology, 2 vols. London, 1902.

この論文集の第二巻の中に次の論文を収録している。
Christian Socialism, On the Decay of Municipal Representative Government, The Religion of Health.
How to Keep Household in Health. An Address Delivered Before the Working Woman's (sic) College, Sold for the Benefit of the Ladies Sanitary Association, 1870.

—Another copy, printed by W. W. Head, Victoria Press, 1870.

The Human Element in Sex, London, 1880; Second edition, 1884, 4th edition, 1885; New edition, 1894.

- The Laws of Life, with Special Reference to the Physical Education of Girls*, New York, 1852; Another edition, London, 1859; Third edition, 1871.
- A Medical Address on the Benevolence of Malthus, Contrasted with the Corruptions of Neo-Malthusianism*, London, T. W. Danks & Co., 1888. pp. 34.
- トハノハナクニシテ返答シテハ書状ニシテ答フ
Baker, Rachel, *The First Woman Doctor, The Story of Elizabeth Blackwell*, M. D., London, 1946. With Foreword by Edith Summerskill.
- Bell, E. Moberly, *Storming the Citadel, The Rise of the Woman Doctor*, London, 1953.
- Chambers, Peggy, *A Doctor Alone, A Biography of Elizabeth Blackwell: the First Woman Doctor 1821—1910*, London, 1956.
- Fancourt, Mary St. J., *They Dared to be Doctors, Elizabeth Blackwell, Elizabeth Garrett Anderson*, London, 1965.
- Ross, Ishbel, *Child of Destiny, The Life Story of The First Woman Doctor*, London, Victor Gollancz, 1950.
- Wilson, Dorothy Clarke, *Lone Woman, the Story of Elizabeth Blackwell*, London, 1970.
- (2) Branca, Patricia, *Silent Sisterhood, Middle Class Women in the Victorian Home*, London, 1975, pp. 122 & 139.
- (3) Wilson, *op. cit.*, p. 441.
- (4) Newman, F. W., *The Corruption Now Called Neo-Malthusianism*, With Notes by Dr. Elizabeth Blackwell, London, 1889.
- (5) Working Women's College ヲノソノヲシテ執筆せし
監
Elizabeth Malleon 1828—1916, Autobiographical Notes and Letters, with a memoir by Hope Malleon, Printed for Private Circulation, 1926, pp. 56—66.
- (6) 'The Shrieking Sisterhood,' a letter signed by 'A Brooding Hen,' *The Pall Mall Gazette*, March 21, 1870, p. 7, col. 3.
- (7) *The Scotsman*, April 20, 1870 p. 2, col. 7; *The Edinburgh Evening Courant*, April 20, 1870, p. 8. col. 4; *The Daily Review*, April 20, 1870, p. 6; *The Times*, April 22, 1870, p. 5, col. 3; *The Times*, April 25, 1870, pp. 8—9; *The Medical Press & Circular*, April 27, 1870, p. 338; *The Scotsman*, May 4, 1870, p. 2, col. 7; *The Medical Press & Circular*, May 11, 1870, p. 379 執筆
(8) Blackwell, E., *Pioneer Work*, 1895, pp. 242—243; Ross, *op. cit.*, 1950, p. 239.
- (9) 'Professor Laycock Again,' *The Medical Press &*

Circular May, 11, 1870, p. 380 参照。

(10) [Drysdale, George] *Physical, Sexual and Natural Religion*, 1854. 邦譯『ナチュラ・セクヤク・トヤクノ宗教』(社会学者の諸原理)に於ける初期の新聞の「反対」(一巻) 巻第八十卷第三号、一八七〇年九月也。

(11) Mill, J. S. *Correspondance inedite avec Gustave D'Eichthal* (1828—1842)——(1864—1871), Paris, 1898, pp. 217—218; *The Later Letters of John Stuart Mill* (Collected Works, vol. XVII) University of Toronto Press, 1972, p. 1911.

(12) Holyoake, A.; *Large or Small Families? On Which Side Lies the Balance of Comfort?* 1870.

ハクハントナル世帯トシテ The National Reformer ニ採録シテ雑誌のコメントメント也。

(13) 'Irrepressible Topics,' 'Quack Advertisements,' *The Medical Press & Circular*, June 8, 1870, pp. 460—461. 464.

(14) *A Medical Address on the Benevolence of Malthus*, p. 4.

(15) *Transactions of the National Association for the Promotion of Social Science* 1869, pp. 213, 217.

(16) William Acton 氏代表時。彼が「禁欲が染病(梅毒)の反対運動の機関紙とせらるべき新聞に於てはロンドンに於てのみ言葉と彼の考へ方は世に於ての表明をたしむる。The

Shield, November 23, 1872, p. 1161.

(17) 'Dr. Elizabeth Blackwell on Marriage,' *The Pall Mall Gazette*, March 24, 1870, p. 4, col. 5.

(18) *Pioneer Work*, p. 246.

(19) *A Medical Address on the Benevolence of Malthus*, p. 4.

(20) *The Times*, April 25, 1870, p. 9.

(21) 'Professor Laycock on Lady Medical Students,' *The Lancet*, April 30, p. 627.

(22) *The Scotsman*, May 4, 1870, p. 2.

(23) 'Professor Laycock Again,' *The Medical Press & Circular*, May 11, 1870, pp. 379—380; Mill, J. S., *Principles of Political Economy*, (Collected Works, vol. II, 1965) Book II, Chap. XIII, §1. p. 368.

(24) Ross, *op. cit.*, 1949, p. 175.

(25) *Victoria Magazine*, June 1870, pp. 121—140; *The Standard*, May 5, 1870, p. 6, col. 7.

(26) *The Pall Mall Gazette*, May 21, 1870, p. 10.

(27) *Ibid.*, May 26, 1870, p. 4.

(28) *Infant Mortality: Its Causes and Remedies*, Published for the Committee for Amending the Law In Points Wherein It Is Injurious to Women, Manchester, 1871, pp. 41.

(29) Pankhurst, E. Sylvia, *The Suffrage Movement*,

1931, p. 31. 参照。

(8) Pare, William, *Co-operative Agriculture: A Solution of the Land Question, As Experimented in the History of the Ralahide Co-operative Agricultural Association, County Clare, Ireland*, London, 1870; Garnett, R. G. *Co-operation and the Owenite Socialist Communities in Britain 1825—45*, Manchester, 1972, pp. 100—164 参照。

(9) Orvis, Marianne (Dwight), *Letters From Brook Farm 1844—1847*, Philadelphia, 1972 (First published 1928, New York), p. 122; *Pioneer Work*, 1914, pp. 10—11.

(10) 拙稿「婦人医学生と新マナス主義——一八七八年に起つた事件」、『橋論叢第七十五巻第六号』一九七六年六月号掲載ページへの事件を扱つた。

(11) *A Medical Address on the Benevolence of Malthus*, 1888 第(1)参照の如く。以下、本文で引くマサチューセッツの難民区容を扱つた『マサチューセッツの難民区』を参照。

(12) *Ibid.*, p. 28, 34.

(13) *Ibid.*, p. 28.

(14) Routh, C. H. F. 'On the Evils, Moral and Physical, Likely to Follow If Practices Intended to Act as Checks

to Populations, Be Not Strongly Discouraged & Condemned,' *The Medical Press & Circular*, October 16, 1878, pp. 305—308.

(15) Fryer, Peter, *The Birth Controllers*, Corgi Edition, 1967, pp. 188—191. 『カーマナルの救済と母性』に引用。

(16) Ellis, Havelock, *Studies in the Psychology of Sex*, vol. VI, 1910, p. 362.

「青春をなむねが現在への結婚制度に偶然生れたるのせいでせよ」などなつたことへの批判が、その後のマサチューセッツの難民区容を扱つた『マサチューセッツの難民区』に述べられてゐる。

(17) *A Medical Address on the Benevolence of Malthus*, 1888, p. 5.

(18) *Essays in Medical Sociology*, 1899 第(1)参照の如く。

(19) *Ibid.*, 1902 第(1)参照の如く。

(20) *Counsel to Parents on the Moral Education of Their Children*, 1878, p. 51.

(一橋大学講師)